現代ギター 昭和42年6月27日第3種郵便物認可 令和3年4月1日発行(毎月1回1日発行)

クラシック・ギターを楽しむための情報誌 Gendai Guitar

現代ギター

www.gendaiguitar.com
April. 2021
4
No.691

GONTITI

特集

ギター名曲総選挙

Scores

スペイン舞曲第1番(ファリャ～鈴木大介)／4月になれば彼女は(サイモン＆ガーファンクル～竹内永和)
心音(福山雅治～岡崎 誠)／楽興の時 第3番(シューベルト～壺井一歩)
夜と朝のあいだに(ビーター～田島道生)／16世紀のリュート小品集より(キレヴッティ～山田 岳 校訂・運指)
オーゼの死(グリーグ～柴田 健)／アンダンテとロンドOp.167(カルッリ)※ギター二重奏
見知らぬ国～「子供の情景」より(シューマン～長谷川雅子)※ギター二重奏

新連載

ジュリアン・ブリーム伝(ワシリー・サバ)／弦の気持ちからのギター再入門(小川和隆)
地球の楽に寄せて(鈴木大介)／ギターで弾いたっていいじゃない(壺井一歩編曲／金 庸太校訂)
新音楽時報(秋岡 陽)

★特別付録★ ギター用語ハンドブック Guitar terminology Handbook

アントニオ・デ・トーレス
“新たなクラッシックギターの音”の創造者にして確立者

Antonio de Torres
Creator and encoder of the "New classical guitar sound"

マルコ・セリット
Marco Sellitto

アントニオ・デ・トーレスの生涯と作品、製作されたギターの数、使用された木材及び寸法の描写等々、この巨匠についての出版物やテキストは多数に渡る。

アントニオ・デ・トーレスに関するこの記事では、私がこの分野で得た経験――ラ・レオーナ、ラ・クンブレ、リョベート使用モデル、アルカス使用モデル他、歴史上最も重要なトーレス作品の実物を分析、かつ研究する機会を得たもの――を生かし、彼がなぜ作品にそれらの製作方法を選んだのか、そしてそれが、このアンダルシア出身の巨匠のギターの音の実現にいかなる影響を及ぼしたかを明らかにしていきたいと思う。

トーレス作品の長年の研究で得た“リヴァース・エンジニアリング”の経験、それはトーレスを単なるギター製作者としてではなく音響プランナーとする視点から、彼の弦楽器製作の芸術における本当の“秘密”、神話的音響の創造へとトーレスを導いたその秘密を解き明かし、理解するための研究であった。

先ず彼の生涯における重要な分岐点を簡単にさかのぼってみよう。

アントニオ・デ・トーレスは1817年にラ・カニャーダ・デ・サン・ウルバーノに生まれた。

1845年、熱意と創造力に満ちた若き日のトーレス（28歳）は、当時スペインで最も国際的な都市の一つであるセビーリャに移住する。当時のより知名度の高い演奏家（アルカス、タレガ、リョベート）が弾いた、最も有名なトーレス作品の数々が彼のセビーリャ時代の作品である事は偶然の一致ではない。

◉ 1856年作 ラ・レオーナ（FE04）

写真1：ラ・レオーナ（下）と著者のギター

アンダルシア出身の巨匠の、議論の余地がない傑作中の傑作。巨匠はこれをボール紙製ギターと共に生涯手放すことはなかった。トーレスは多くの機会にラ・レオーナを有名な演奏家フリアン・アルカス（1832 ～ 1882）に貸している。

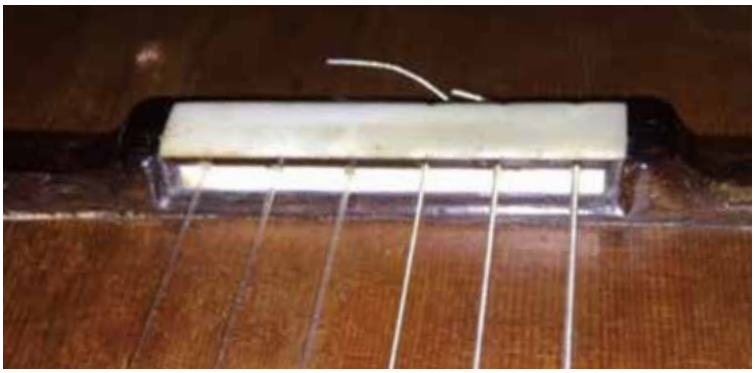

写真 2：ラ・レオーナのサドルの無いブリッジ

写真 3：ラ・レオーナのラベル

◉ 1858 年作ラ・クンブレ（FE08）

写真 4：ラ・クンブレの裏板と側板の複雑な装飾を示す筆者（2000 年代初頭）

1858 年に開催されたセビーリャ万国博覧会に出品して銅メダルを獲得した作品。ラ・クンブレとは“山頂”の意味。

最も華麗に装飾されたラ・クンブレと、最もシンプルで安っぽい「厚紙のギター」の 2 つのギターで、トーレスは私たちに次のことを教えてくれる：本当に「鳴る」のは製作者の意図（プロジェクト）である！ 実際、大きな差がある費用と材料を使っていながら、この 2 つのギターはトーレスのすべてのギターに存在する同じサウンド基盤によって統合されている。

写真 5：ラ・クンブレの特徴　銀のラベル、ロゼッタ象眼細工と“トルナボス”

◉ 1859 年作リョベート使用モデル（FE09）

写真 6：リョベートが使用したトーレス（FE09）

写真 7：リョベート使用ギター（FE09）の裏板。ヒビ割れに注目

このようなヒビ割れがリョベートの時代から既に存在していた事は興味深い事実であるが、ギタリスト・リョベートは、愛しいギターの音が価値を落としたり変化してしまう可能性を恐れ、生涯その修理をしたがらず、本人の他界後も決して修理は行なわれないよう遺言書に記している。そのためFE09はリョベートの時代と全く同じ状態で現代に残っている。その後1866～1867年に、若きフランシスコ・タレガはトーレスの工房を訪れ、巨匠がそれまで自身のために気に入って保管していた逸品、1864年作FE17を購入する。このギターは、その洗練されたバランスの良い音色と音響特性により、フランシスコ・タレガの天才的独創性を刺激し、その作曲の進化に貢献した。

1869～1870年、トーレスはセビーリャを離れアルメリアに移る。経済的困窮のためギター製作活動を約5、6年中断し、後妻と共に磁器の販売に専念する事を余義なくされる。そしてたとえフルタイムでなくとも、再び巨匠がギター製作に復帰し、自身によって定義付けられたかの有名なSE（Segunda Epoca= 第2期）に命を吹き込む姿に巡り会えるのは1875年の事になる。

（次号に続く）

写真8：FE09（1859年）のトルナボス

写真9：Segunda Epoca 116と書かれたオリジナル・ラベル

筆者紹介

カヴァリエーレ（騎士勲章 ）マルコ・セリット
Cav. Marco Sellitto

マルコ・セリットは1973年12月ナポリ生まれ。ナポリのサン・ピエトロ・ア・マイェッラ音楽院にてギターを学ぶ。米国テキサス州オースティンのコッカリル工科大学電子工学部にて、「物理的および心理的現象としての音響学の研究と電気音響学の分野への応用」と称する卒業論文で学士号取得。その後政治学、公共行政学、法学において学士号を取得し自身の教養を高め、さらにローマのルイス・ビジネススクールにてEMBA修士号を取得。応用音響学の分野における研究開発に従事するエンジニアとして、音響とその成分（音色、ダイナミクス、強度、ミクロ・マクロ動力学）について詳細に分析。また、空間の音波伝達の変換器である人間の耳と、音の“主観的知覚”の研究を平行して深める。同時に、音楽、特にクラッシックギターに対する情熱から、木材の特性とクラッシックギター製作におけるその役割に関心を持ち、スペインの偉大な創始者、アントニオ・デ・トーレスをはじめとする歴史的ギター製作者の概念と製作法を分析しながら学ぶ。また、トーレスに関しては今日国際的最高レベルのエキスパートの一人と見なされている。

音響エンジニアとしてのノウハウをクラシックギターの伝統的製作技術の世界につぎ込み、新しい概念に基くクラシックギターを生み出す。そこには由緒ある伝統の継承だけでなく、音響へのたゆまない情熱により実現された重要なイノヴェーションの存在も反映する。そのイノヴェーションとは先ず、偉大なる科学者ニコラ・テスラに敬意を表し命名された“テスラ処理法”、ギター製作に使用される木材を特種な方法で分極させる事により、それらが“分子配向”されることを可能にする技術。次に、表面板響棒の設計においてギター製作史上初の、2本のマスターチェーン（サウンドホールの上下に平行して位置する“主響棒”）を使用しないという全く新たな設計プラン。さらに、空間における音波の伝達方法の分析と、その反響と余波の相対現象に関する研究に基づいて、内部で生じる波形をより有効に伝達させる事により、下は65Hz（チェロの最低音）から、上は3,000Hz以上（ヴァイオリンの最高音）までの周波数応答を得るという、クラッシックギターの“共鳴胴”における新たなコンセプトを実現させる。

また、ストラディヴァリをはじめ、アマティ、グアルネリなどの偉大な巨匠達によるクレモナ地方のヴァイオリン製作技術に使われた塗料を長期に渡って研究した結果、天然樹脂のみで調整する塗料の処方を完成させる。

木材の一つ一つを奥深く分析し、それらの音響的可能性を解釈しながらより有効な方法で作品を設計する事をギター製作の基準とする。

使用材料の面では木材こそが唯一の主人公であり、同一設計の結果でありながらそれぞれのギターに確固たる独自性が生まれる。何より音そのものが、その質・量の判断基準を踏まえて、創作の目的となっている。そんな各々のギター固有の音響特質を重んじるセッリット作品は、レプリカや連続性の概念から隔たっている。

セリットはまた、ギター界の重要な著名人から敬意を表されている。